

地域と学生の協働による魅力的なまちづくり

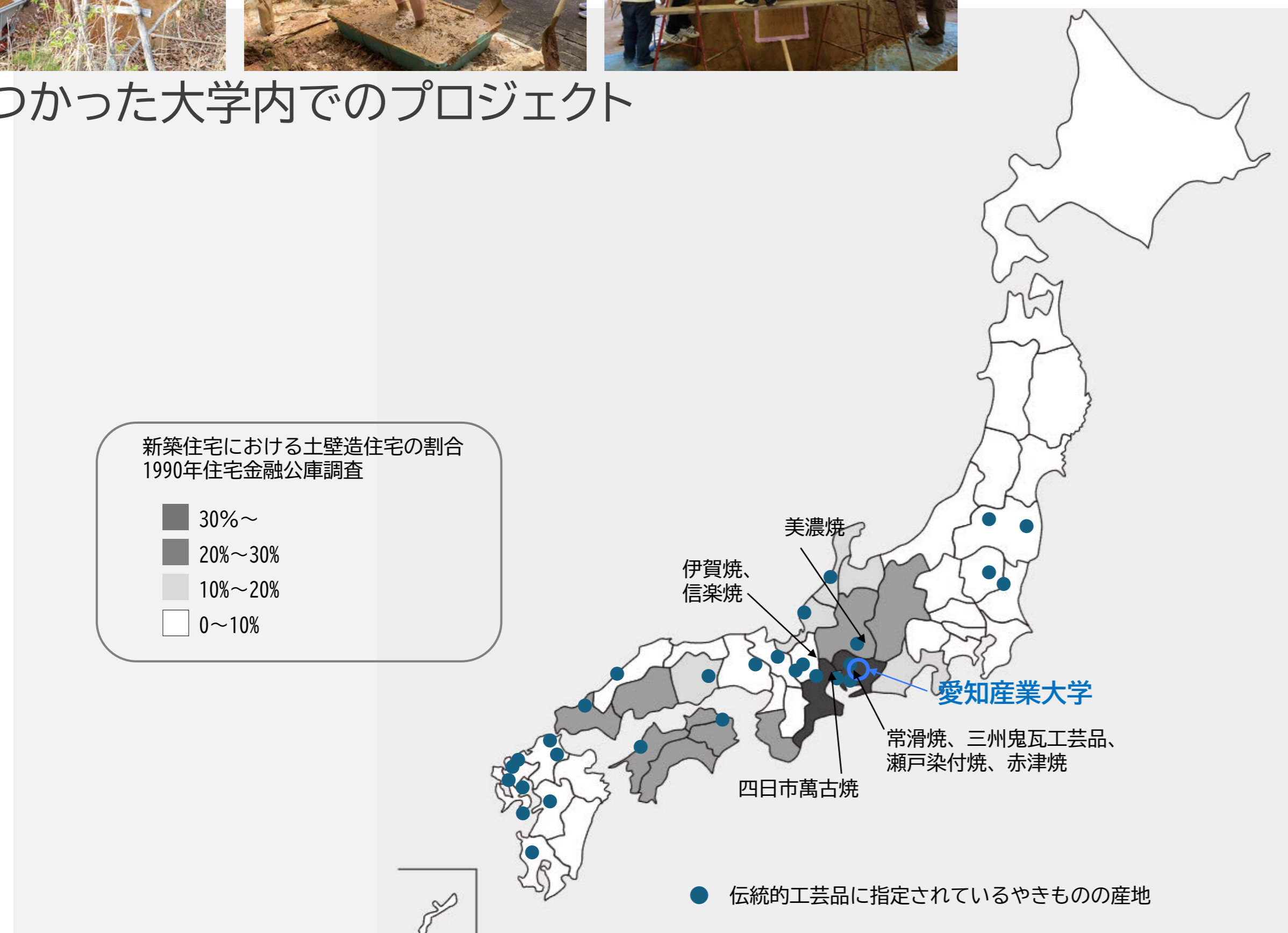
造形学部 建築学科 宇野 勇治

「土」に恵まれた東海地方

- 所在する愛知県は、瀬戸や常滑などの陶磁器、高浜の瓦など、土を用いた産業が古くから盛ん。
- 「土壁」住宅の新築は、今でこそほとんど見受けられないが、1990年において、東海3県の施工実績は高い割合だった。



土をつかった大学内でのプロジェクト



藤川宿「米屋」の改修

旧東海道三十七番目の宿場、藤川宿(愛知県岡崎市藤川町)は、江戸時代の盛期には百棟以上の町家が軒を連ねていましたが、現存する伝統町家は僅か。

米屋(旧野村家住宅)は、天保年間(約160年前)の建築であり、江戸時代には穀物商として栄えた。(岡崎市重要景観建造物)

宿場町の風情を感じさせてくれる貴重な建物だが、破損や老朽化が進行し、また昭和期の改修により江戸期の面影を感じにくい状況となっており、修繕は急務。

そこで、外観の修景工事、内部の改修工事などを、地元の団体と協働して実施をした。



改修前



改修後



松應寺 版築土塀の復原

松應寺は、岡崎市松本町にある寺院で、徳川家康の父、弘忠公の廟所がある。古い絵図を見ると江戸時代には壮大な寺院。

弘忠公の廟所には、松の木が植えられており、その周りを土塀が取り囲んでいる。しかしこの土塀が長年の風雨で崩壊してしまったことから、今回これを復原すべくプロジェクトに関わることに。

土塀は土を層ごとに突き固めた「版築(はんちく)」で作られている。なるべく旧来の方法を用いて再現してみようということで、試作を行った。



改修前



版築の試作

まちの縁側をつくろう

『三ヶ根駅周辺エリア 未来工房』

豊かな自然や、ほのぼのとした雰囲気、伝統ある社寺などの地域資源を活かしながら「三ヶ根駅周辺エリア」をどのようなまちにしてゆかかを構想するプロジェクト。

気軽に立ち寄って、みんなでお話ができるようなスペース、「まちの縁側のような空間」をつくることに。ワークショップができる木のラウンドテーブル、子育て中のお母さんたちが来たくようなカフェっぽい雰囲気、手作り感、なるべく地域の材料を使えるとよいのでは、などのアイデアが出された。

テーブルやデスクは、国産の木材を活用して制作した。テーブルの脚の部分は愛知県産のヒノキ材、天板は国産のスギ材。



駅周辺を活性化するための提案として、「三ヶ根・三河湾サイクリングロード」を提案。サイクリスト向け宿泊施設や飲食店などを増やし、滞在型の観光が可能に。自転車での通行に危険を感じる箇所も散見されたことから、自転車の通行帯の整備や路面の整備を行うことなども提案。

